

静岡
SHIZUOKA

第2回 全国街道交流会議 静岡大会

街道400年 そして未来の道「新・街道学のススメ」

「街道400年、そして未来の道『新・街道学のススメ』」をテーマにした第2回全国街道交流会議静岡大会が2月7、8日の2日間にわたって、庵原郡富士川町中央公民館にて開催された(参加者約500名)。

てい談、分科会、現地視察などを通じ、街道の今日的意義を見直すと共に、未来に向けた「まちづくり」「みちづくり」とは何であるのかを模索した。

てい談においては、道は昔から刺激的な存在で、ヒト・モノ・情報の交流が行われていた。21世紀の道に必要なのは心の交流で、そのためには官民の協力が必要であろう(竹内誠氏:東京都江戸東京博物館館長)。江戸幕府の公営からスタートした飛脚を考えれば、情報が金になるということは今も同じ。また飛脚問屋をみれば、ネットワークの構築の重要性もIT社会となった今日でも変わりはない(森谷尅久氏:武庫川女子大教授)。



このてい談を受け、「東海道学」(東海道400年そして明日は)、「街道活用学」(街道から学び、街道を活かす)、「現代道学」(道とともに地域を創る)、「道の“たまり”未来学」(現代の宿場機能を考える)の4分科会が2日間行われた。人やモノが行き交い、文化を醸成させた各地の取り組みが報告され、今後の役割や方向性を探った。街道は地域資源を語る意味でも極めて重要な資源であり、地域社会が崩壊していると言われる今日だからこそ「道」をキーワードに地域再生を考える必要がある。さらに、活動を展開していくには人的ネットワークを広げていくことが不可欠で、そのためには活動をNPO(民間非営利団体)化させていくなど、新たな仕組みづくりが必要ということで議論は集結した。

なお、次回(第3回)の街道交流会議は、羽州街道の通る山形県上山市で開催される予定である。

神奈川
KANAGAWA

横浜の大学が市心部進出 地場企業との連携推進も

横浜市内の大学が社会との接点を求めて、新たな取り組みを始めた。神奈川大と横浜国大はMM21地区、関東学院大は関内地区と、いずれも市心部に4月からサテライト・キャンパスを開設。これらの



横浜市内の3大学が4月からそろってサテライト・キャンパスを開設した市心部

キャンパスを生涯教育の拠点、ビジネス・スクール、法科大学院のサテライト教室などに使っている。

同市も、市民の学習ニーズやスキルアップの欲求に応えられるとして、こうした取り組みを歓迎。今後、市内にキャンパスを置く24大学に呼び掛けて協議会を組織し「都市の中で市民と大学が新しい文化をつくり出す“21世紀型大学都市”を目指す」(中田宏市長)と意気込む。

また、3大学に鶴見大、横浜市立大などを加えた9大学と横浜商工会議所は昨年12月、インターンシップ推進協議会を設け、学生の就業体験支援に乗り出した。企業の受け入れ体制、公的な支援制度などの課題を整理し、夏には会議所会員の協力でインターンシップを体系的にスタートさせたい考えだ。

これに先立って同会議所は昨夏、学校法人などにも会員資格を拡大した。不況で低迷する会員を増強するとともに、大学

の研究成果を活用して産学連携の実を上げるのが狙い。大学側にとっても、学生の就業先開拓などのメリットがある。すでに神奈川大、関東学院大、横浜商科大が会員になった。

同市内の大学が「象牙の塔」から脱出を図っている背景には、「2009年問題」と呼ばれる経営環境の激変がある。大学受験人口(18歳)は、1992年には全国で205万人だったが、少子化の影響で昨年は146万人に減少。09年には、入学定員とほぼ同じ121万人となる。「大学全入時代」を目前に控え、サバイバル競争が始まっているのだ。

大学といえども経営体。人的、物的資源を十二分に生かして「特色のある優れた教育」という“商品”を開発し、売り込みに成功しなければ存続はおぼつかない。今後数年の間に相当数の大学が経営破たんするという予想もある中で、生き残りへの知恵比べがますます盛んになりそうだ。